

ミュージアム・アイズ

MUSEUM EYES

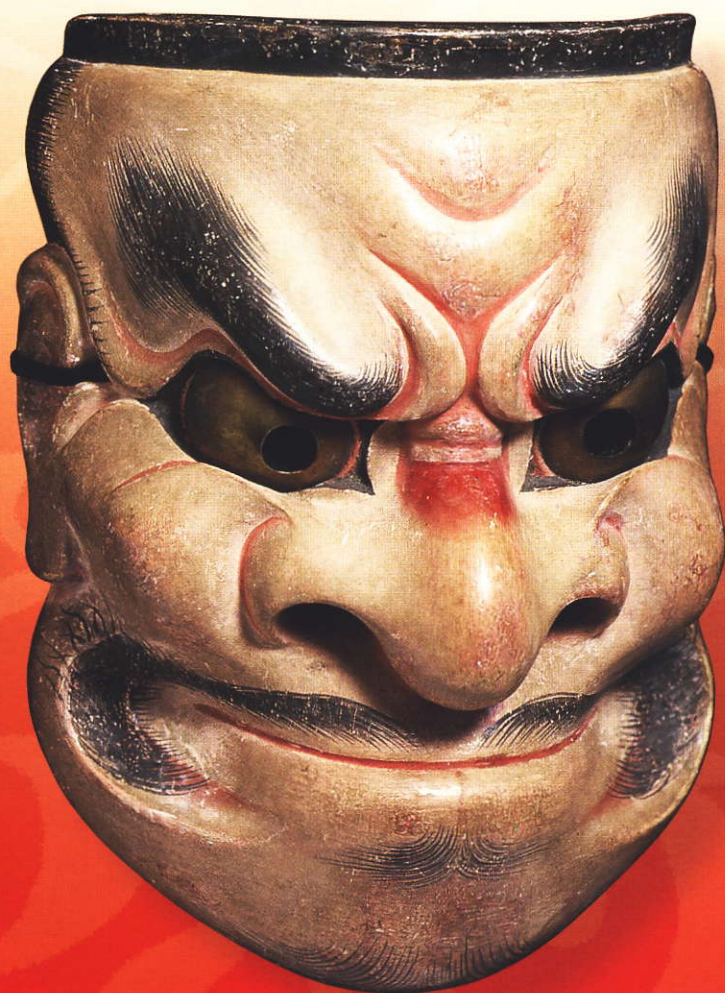
Vol. 58
2012

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM



譜代大名内藤家と能楽

—能楽史料としての内藤家文書—



おおべし
内藤家旧蔵の能面 大惣見
延岡市 内藤記念館所蔵

Contents

- 博物館活動報告／図書室から
- 展示&リサーチ —— 布物資料の保存・展示方法について
- 市民レクチャー —— 泉坂下遺跡の人面付土器と再葬墓（下）
- 学芸研究室から —— 後期旧石器時代初頭における環状ブロック群と現代人の拡散（2）
- 収蔵室から —— ウサギは儲かる!? — 時田昌瑞ことわざコレクション「道化利やくの多んむすび 吉人が死に蟹八足」
—— 古代瓦の作り方 — 前場幸治コレクション —
- 南山大学協定通信
- 博物館友の会から —— 友の会分科会「旧石器・縄文文化研究会」

譜代大名 内藤家と能楽

—能楽史料としての内藤家文書—

延岡市 内藤記念館 主任学芸員 増田 豪

現在、明治大学博物館が所蔵する旧延岡藩主内藤家が伝え残してきた約5万点にもものぼる古文書群は、日本国内屈指の貴重な歴史資料と言えます。この内藤家文書を用い、これまで様々な視点から研究がなされ、多くの成果が報告されてきたところですが、その点数の多さから、まだまだ取り上げられていない史料も数多く存在しています。

そこで、この膨大な量を誇る内藤家文書のさらなる研究促進を目的としたプロジェクトの第1弾として、同文書群における能楽に関する史料に着目し、その公開を目的とした調査が、昨年6月6～8日にかけて行われました。これは、内藤家が「天下」の焼印の捺された能面30面を含む72面の能・狂言面を所蔵するなど（平成5年2月、延岡市に寄贈）、能楽に熱心に取り組んだ大名家の一つと考えられることから掲げられたテーマと言えますが、内藤家文書には、江戸時代の能楽の様相を明らかにする上で、非常に興味深い史料が数多く含まれています。

例えば、内藤家と能楽の関わりを示す最も古い史料は、能役者への配当米の負担を4代当主・政長に命じた、元和6年

【延岡城下図屏風】吉田精孝氏所蔵



(1620) 10月12日の「江戸幕府老中・勘定頭連署奉書」(内2-4-1) になりますが、この史料には「御知行高四万石ニ付六石出申候」として、当時、佐貫藩主として4万石の大名であった政長に対し、米6石の納入が課せられていたことが記されています。この配当米の制度については、これまで『台徳院殿御実紀』元和4年10月12日条における「封禄の数に応じ、廿万石は二十石づゝ出し」の記述より、幕府は各大名家に対し、知行高1万石につき米1石の負担を課していたと考えられていたわけですが、この

史料からは一概にそうとは言い切れない状況であったことが窺えます。実際、この配当米を納めた際に発給される「猿楽配当米受取手形」(内1-24-323)には、延享4年(1747)に延岡藩へと転封する以前の磐城平藩時代には米11石5斗5升に相当する金銀を、転封後は米21石に相当する金銀を納めていたことが記されています。内藤家は延岡藩への転封に際しても、磐城平藩時代と同じ知行高7万石の藩主ですから、これらの史料からは、猿楽配当米の制度が各藩によって負担の異なる制度であったことを指摘することができます。

また、延岡入封時に先の藩主牧野家より引き継ぎ文書として作成された「祭礼并祈祷代参諸遷宮神事能取喫」(内1-28-22)や「御能道具改帳」(内2-11-131)などの史料からは、大名家の私有財産として捉えがちな能道具類が、神事に使用する能道具類については、転封に際して引き継がれる量や建具などと同様に、次の藩主に引き継がれるべき藩有財産と見なされていたことが窺えます。実際、内藤記念館が所蔵する能・狂言面は、15代当主・政義が明治以降に蒐集した能道具類を記す「御能装束買料帳」(内1-5-53)や、それを含めた内藤家の能道具台帳と言える「面扇鬘帯腰帯紐露小道具」(内1-5-68)に記された能・狂言面とは一致せず、江戸時代を通じて延岡城下で行われてきた神事に使用するため、内藤家入封以前の歴代藩主によって引き継がれてきた能面群である可能性が高いことがわかってきました。

このような史料以外にも、神事をはじめとする藩領内で開催された能の番組を記す「岩城・延岡覚帳」(内1-10-1～108)や、演者となる家臣達の江戸での修業の様子を記す由緒書、また近代における、いわゆる華族能の状況を記す史料なども含む内藤家文書は、近世・近代の能楽史研究を進める上で、多くの可能性を秘めた古文書群と言えます。

今回の調査では、明治大学常勤理事(教務担当)でもある法学部教授の土屋恵一郎氏、明治大学文学部教授落合弘樹氏、茨城大学文学部准教授磯田道史氏、跡見学園女子大学文学部准教授横山太郎氏、明治大学博物館学芸員日比佳代子氏、そして筆者の6名がそれぞれの立場から意見交換を行い、多くの方々に利用していただけるよう、撮影ならびに翻刻作業を進める10点の史料の選定を行いました。今回ご紹介した史料を一部含む、その成果につきましては、明治大学博物館より近く公開される予定となっております。ぜひ、これらの史料をご覧ください、内藤家文書の新たな世界を探訪していただければ幸いです。

※2012年2月8日～4月30日まで「内藤家文書にみる能楽関係史料」として、常設展示室で一部史料の展示を行っております。



【内藤家旧蔵の能面 般若】延岡市 内藤記念館所蔵



【猿楽配当米受取手形】(内1-24-323)



【祭礼并祈祷代参諸遷宮神事能取喫】(内1-28-22)



【御能装束買料帳】(内1-5-53)

調査風景



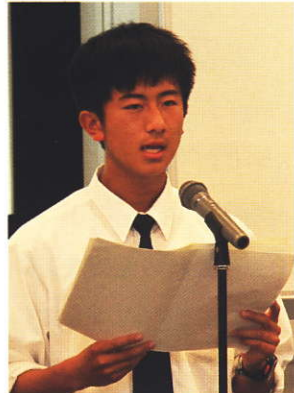
「ふるさと歴史自慢」作文コンテスト 授賞式報告



2011年10月16日、明治大学博物館で「ふるさとの歴史を調べて明治大学に行こう！作文コンテスト」の授賞式が行われました。

この作文コンテストは、内藤家文書と関わりの深い宮崎県の子供達に地域の歴史をしらべて、ふるさとの歴史を作文で自慢してもらおうというもので、2011年の夏休みに宮崎県延岡市の小・中学生、宮崎県内の高校生を対象に作文を募集し、66件の応募作品から厳正な審査を経て、受賞者9人が決定しました。

授賞式では博物館友の会のメンバーが見守る中、杉原重夫博物館長から小学生・中学生・高校生各部門の優秀賞1人、入選2人計9人それぞれに賞状と記念品が手渡されました。続く、優秀賞の作文発表では、小学生の部・佐藤夏紀さん（延岡市立北浦小学校5年）、中学生の部・末廣つぐみさん（延岡市立岡富中学校3年）、高校生の部・沼勁太郎さん（宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校4年）が元気に作文を読み上げました。



おめでとう
ございます

- | | | | |
|--------|-----|-----------------------|---------|
| ■小学校の部 | 優秀賞 | 延岡市立北浦小学校五年 | 佐藤夏紀さん |
| | 入選 | 延岡市立旭小学校六年 | 小野隼弥さん |
| | 入選 | 延岡市立黒岩小学校六年 | 小田原海さん |
| ■中学校の部 | 優秀賞 | 延岡市立岡富中学校三年 | 末廣つぐみさん |
| | 入選 | 延岡市立恒富中学校二年 | 今村晴菜さん |
| | 入選 | 延岡市立北方中学校二年 | 菅原岳史さん |
| ■高校生の部 | 優秀賞 | 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校四年(高校一年) | 沼勁太郎さん |
| | 入選 | 宮崎県立高城高等学校二年 | 柏田大貴さん |
| | 入選 | 宮崎県立飯野高等学校二年 | 谷口千香子さん |

●博物館活動報告

公開特別講義 伝統的工芸品の経営とマーケティング Vol. 6

和食器専門店から見た伝統工芸の今を開催しました。

講師 内木孝一氏(うつわの店「大文字」店主)

2011年12月7日(水)開催

商品部門の調査・研究推進の体制として2006年に発足した「伝統的工芸品の経営とマーケティング」プロジェクトの事業として年1回開催し、今年で6回目となりました。この講義は、商学部の高橋昭夫教授の「商品学」、福田康典准教授の「市場調査論」の授業の拡大版ということで、他専攻科・学部の院生・学生や一般の方々に門戸を開いたものです。

これまでの調査を通じて見えてきたのは、顕著な中間流通機構の衰退と、メーカーと小売現場、あるいは消費者との商品に対する認識のギャップでした。手作業の伝統工法による陶磁器は高コストを避けられず、したがって価格も機械量産品の何倍にもなってしまいます。そこで、高付加価値商品に位置付けての商品開発とマーケティング活動が必要とされ、そうした動向を追ってきましたが、一方で生活実用品として陶磁器を位置付けるとすれば、また、異なった評価が必要なのではないかという視点も出てきました。今回は、表参道に店舗を構える「うつわのみせ大文字」の店主内木孝一氏を講師としてお招きし、小売店経営者の、あるいは流通に関わる立場から和食器生産の現状を分析していただき、伝統工法の活用をテーマとする基調報告とパネルディスカッションによる特別講義をおこないました。

内木講師は、伝統工芸を語る立場にある評論家や研究者、作る立場にあるメーカーの描く伝統工芸像と、実際の消費者ニーズがずれてしまっていることを強調されました。確かに、「伝統工芸を守ろう!」という視点に立つと、世の中に流通している食器のほとんどが手作業によるものにはなり得ないこと、誰もが朝・昼・晩と伝統工芸の器を使えるわけではないという現実が見えなくなってしまう。機械による成形や転写・印刷による絵付けは、工業の近代化の過程で技術的な進化の帰結として受け入れられてきた合理的な方法であり、それを全否定することなどあり得ないわけです。一方、単純にコストを下げることを考えた商品開発では、商品の質は下がる一方だという指摘にもうなずけます。消費者に受け入れられやすい一定の条件の中で、いかによいものを作るかという考え方が重要で、そのために近代工法のメリットを生かすことは是としなければならないということです。伝統技法の継承には、近代工法によって手頃な価格となった器の利用を考慮に入れた普及啓発が必要なおことに気付かされました。

※この講義の抄録は「明治大学博物館研究報告」17号(2012年3月31日刊行予定)に収録されます。



図書室から

図書室からでは、博物館併設の図書室に関することをご紹介します。今回は、受付についてとりあげます。

博物館図書室をご利用の際には、入口を入ってすぐ左の事務室受付、もしくは、直進していただいた先にある図書受付にて、図書室利用申込書の記入をお願いしております。

図書受付は、明治大学博物館友の会、博物館図書室管理員ボランティアの方が担当して下さっています。現在の在籍者数は19名。1日または半日交替(9:50~13:00、13:00~16:30)の当番制です。

ボランティアの方の中には、ボランティア勤続10年以上の方(明治大学博物館前身の刑事博物館、考古学博物館図書室時代からの方)、様々な講座に参加されている方、土器作りをしていた方など、様々な知識と経験を持った方が在籍しています。

もし何かわからないことがあったら質問をしてみてください。もしかすると、何か素敵な情報と出会えるかもしれません。どなたにめぐり合えるかは来てからの楽しみ!!お待ちしております。

*図書室管理員ボランティアは随時募集中です。よろしくご依頼致します。

開室時間: 平日・土曜 10:00~16:30(日曜祝日、夏季休暇、冬季休暇を除く)



布物資料の 保存・展示方法について

あぎお なおこ
腮尾 尚子 (広島修道大学)

1、はじめに

私の専攻分野は江戸文学であり、主に、江戸時代中期・後期に出版された大衆向け絵入り読み物を研究している。そうしたジャンルの作品の全体像を理解するためには、文章を読み語釈に努めるだけでなく、挿絵・口絵に何が描かれているかを正確に捉えることが出来なければならない。つまり、当時の大衆の生活文化に関する幅広い素養が必要である。従って私は、大衆の衣食住・年中行事・俗信等について、様々な文献の記述だけでなく、「実物」(遺物)も参考にして、実態を追究しようと努力している。

本稿では、私の研究に関連する「実物」の例として、古い布物資料に着目して、その保存や展示の方法について私

見を述べる。私は展示学や保存科学の専門家ではないが、門外漢なりの試行錯誤の告白として受け止めて読んでいただければ幸いである。

2、古い布物資料の保存

私は、勤務先の個人研究室の一角と、自宅の一室に、研究授業に使う「実物」資料を安置している。「実物」とはつまり、コピーや写真ではない、物体そのものである。私の元に今ある実物資料は大きく分けて、標本・紙物・布物の三種類である。標本とは、例えば、家蚕の繭・苧(麻の茎の皮)・スクモ(藍の葉を発酵させた物)等といった、動植物体やその加工品である。紙物とは、江戸時代の版本・版画等であり、布物とは、古着・

古ぎれ等である。これらの中で、私が最も保存に苦労しているのは、布物である。

私は古い布物資料を一点ずつ畳紙(市販または自作の物)に入れ、その「資料名」を畳紙の表面に記しているが、まずこれが非常に困難な作業である。文学作品ならば一般に表紙を見れば書名が記されているものだが、布物の場合はそうはいかない。その布物資料の素材・色・文様等をみきわめ、言語化して、何とか自分で資料名を付けるしかない。

そして、畳紙は通気性が意外と悪く、中が蒸れることがある上、密閉性もなく、虫が入ろうと思えば入れるので、適宜資料を出して湿気を飛ばし、防虫剤を入れておかねばならない。防虫剤は、種類の違う物を使うと、それらの成分が反応し、シミになってしまうことがあるので、一銘

柄だけに定めて、それをずっと使い続けるのが安全策である。私はもう何年も、「M」という防虫剤)を使い続けている。

私の学生時代の恩師は、「ナフタリンペーパー」(紙にナフタリンをしみこませた物)を適当な大きさに切って愛用されていた。私もそれに倣おうかと思ったこともあったが、居住空間から独立した収蔵庫という物を持たない私が「ナフタリンペーパー」を使った場合、毎日、強いにおいを発する資料のそばで食事したり勉強したりしなければならなくなるので、結局、においのしない、一般家庭の衣類用のMを選択した次第である。

3、古い布物資料の展示

2011年8月21日～28日、明治大学博物館の企画展示室にて、国際図像解読研究会主催の企画展「民衆の図像展」が行われた。内容は二部に分かれており、そのうち「第一部 江戸・明治・大正期の結婚・育児にかかわる図像」を私が担当した。(「第二部 東アジアとヨーロッパの生と死をめぐる図像」は林雅彦氏・西岡亜紀氏が担当)。

この「第一部」では、水野恵子氏所蔵「寶水堂(ほうすいどう)コレクション」より拝借した藍染め木綿布(布団表・風呂敷・湯上げ・子負い帯・襦袢)や、

腮尾所蔵の子供着物・人形墨等を展示した。小さな物は全て台の上に平置きし、子供着物は既成の着物用ハンガーにかけ、その他、布団表・風呂敷・湯上げ布といった大型の木綿布は専用の展示具を作って壁面に吊るすことにした。

この種の大型の長方形・正方形の古い布物資料を展示する場合、他館の展示では、資料上辺に直接「乳(ち)」(細長い布きれで作ったループ)を幾つか縫い付け、ノレンのようにして、棒を通し、その棒にワイヤーをつけて吊っている例があった。また、資料上辺の数カ所をピンチではさみ、そのピンチにワイヤーをつけて吊るという例も見られた。

しかし今回の展示では、特製の二本のバーで資料の上辺を端から端まで挟み、そのバーをワイヤーで吊るという方法を考えた。資料そのものに手を加えずに原状を重んじ、また資料の重量を点でなく面で支えることによって、資料の変形を防ぎたかったのである。

この展示バーを実際に制作して下さったのは、展示協力者の玉本太平氏であった。氏は、前述のような私の基本方針に、更に独自のアイデアをプラスして、機能的にも見栄え的にも素晴らしい展示バーを開発された。

その「玉本氏方式」の作り方を参考までに記しておく。まず半円柱型の木材

二本を用意し、その平らな面(資料に触れる面)に、ホームセンター等のDIYコーナーにある「すきまテープ」(防音・防寒のためドア等の隙間に貼る接着剤付きのスポンジテープ)を貼る。そして、木材二本で資料を挟んだ後、その二本の両端を針金で巻き締めて固定する。更に、木材の中央部にネジ式のクリップを取り付ける。このネジの締め加減を調節することにより、二本の木材と資料に対して、丁度よい圧を加えることが出来るのである。

4、終わりに

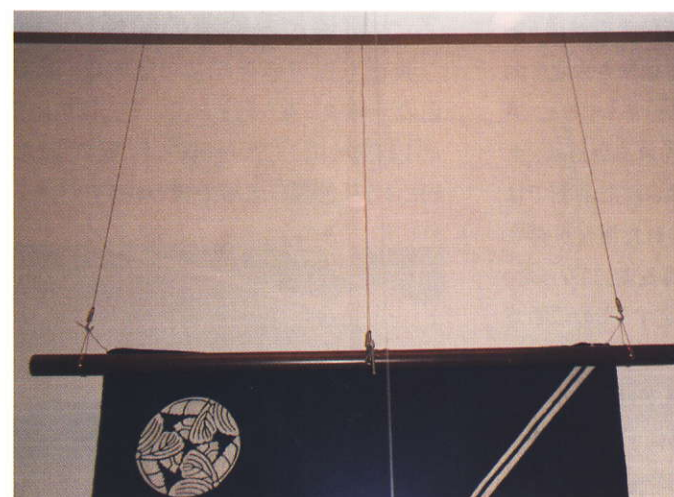
古い布物資料の保存や展示の方法については、私自身、今現在、良策を模索している途上である。一般に、江戸時代の大衆、つまり町人や農民など被支配者階級の人々の残した着物等の布物資料は、支配者階級のそれに比べると安価な素材で出来ており、現代人の目にはあまり貴重な品物には見えないことが多いかもしれない。しかし、そうした遺物がすっかり姿を消す前に、意識的に後世に残していかなければならない。遺物が失われてしまってからでは遅過ぎる。特に、我が国が自然災害の脅威にさらされている昨今、古い物を残していくことの大切さ・困難さを痛感せざるをえない。



「民衆の図像展」の「第一部」前半の壁面



「民衆の図像展」の「第一部」後半の壁面



正面から見た展示バー(玉本氏方式)と「寶水堂コレクション」の藍染め木綿布(風呂敷)



斜め横から見た展示バー(玉本氏方式)と「寶水堂コレクション」の藍染め木綿布(左=布団表、右=風呂敷)

泉坂下遺跡の 人面付土器と再葬墓(下)

鈴木 素行 (財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社)

5. 「再葬墓」という墓制

竪穴の中に複数の土器が埋設された遺跡について、1940年代には、おさかた女方遺跡を調査した田中国男が、収穫祭のような祭祀の跡と考えていた。これに対して、群馬県岩櫃山鷹の巣岩陰遺跡を調査した杉原莊介は、土器の脇から人骨も検出されたことから、土器は副葬品で、「墓地ではないか」と考えた。1950年代になると、神沢勇一が、墓地説を継承しながらも、これに「洗骨の風習」を想定した。「洗骨」とは、一度土葬などで埋葬した後に、遺骨を海水などで洗い再度埋葬する葬制であり、琉球諸島では戦前まで行われていたという。1963・1964年、杉原が調査を実施した千葉県岩名天神前遺跡では、壺形土器の中から成人の骨が検出され、納骨器であったことが確定する。土器の大きさや形から、成人の遺体をそのまま収納することは不可能であり、一次的な埋葬の後に、白骨化した遺骨の一部を洗骨して土器に納め、これを竪穴の中に埋設するという、二次的な埋葬のための施設と考えられたのである。このような墓制が再葬墓と呼ばれることになった。

6. 泉坂下遺跡の再葬墓

泉坂下遺跡の調査でも、複数の土器が竪穴に埋設された状態で出土した。なかでも第2号墓壙は、実に14個体の土器を数えた。土器の内部に堆積した土壌は全て、3mm方眼のフルイを使用して水洗した。人骨片は検出されていないが、岩名天神前遺跡などの事例を基準として、これを再葬墓と判断している。再葬墓と考えられたのは、7基であった。



壺形土器のほとんどは、竪穴の底面に横倒しの姿勢で埋設されていた。先に置いた土器の一部に重ねて、後の土器が据えられていることから、土器を埋設した順序が復元できる。第2号墓壙の14個体の土器は、竪穴の南から北に向う順序で土器が埋設されていた。同じように、人面付土器が伴う第1号墓壙も、4個体の土器は南から北に向う順序で埋設されている。そうすると、第1号墓壙の南側半分に見られる空白は、土器が埋設されないままに残された余剰ではなく、土器よりも先に設置された何かが存在していた可能性が考えられるようになった。ただし、その「何か」を特定するための手がかりが、今回の調査では得られていない。

また、壺形土器のほとんどは、その形状を保つような状態で、内部に土壌が堆積していた。ところが、なかにはベシャンコに潰れている土器もある。おそらくは布か皮か、

有機質の蓋が被せられていたのであろう。土器が潰れたのは蓋が機能していた期間の出来事で、蓋が腐食することで潰れていない土器の内部へは土壌が流入することになったと考えられるのである。

7. 土壙墓と再葬墓の関係

泉坂下遺跡の再葬墓の竪穴は、黒褐色の土層中に掘り込まれている。掘り上げた土が埋め戻されたのであろう、竪穴もまた同じような色調の土層で覆われていた。こ



れが土器の内部にも流入したとすれば、土壌の特徴は一致するはずである。ところが、人面付土器を取り上げる際に内部を観察してみると、下の方に堆積した土壌には、黄褐色のローム土粒が混じることに気付いた。竪穴の覆土には見られないこのローム土粒は、何に由来するものなのであろうか。

泉坂下遺跡には再葬墓の他に、直径0.7~1.0mほどの略円筒形の土坑も検出されていて、これは膝を抱え込んで座するような姿勢で埋葬された座葬による土壙墓と考えられた。土壙墓の底面はローム層を掘り込んでいて、埋葬に伴って埋め戻された土壌には、ローム土粒が混じる。再葬のために土壙墓から掘り出された遺骨には、このローム土粒が混じる土壌が付着し、人骨の凹部にも入り込んでいたのではないかと。土器の内部から検出されたローム土粒は、再葬に伴い人骨とともに土壙墓からもたらされることになったと考えられるのである。

弥生時代の再葬墓は、「洗骨の風習」を参考に研究が進められてきたが、泉坂下遺跡の調査では、人骨に付着した泥をきれいに洗い落すような「洗骨」は認め難いことになってしまった。

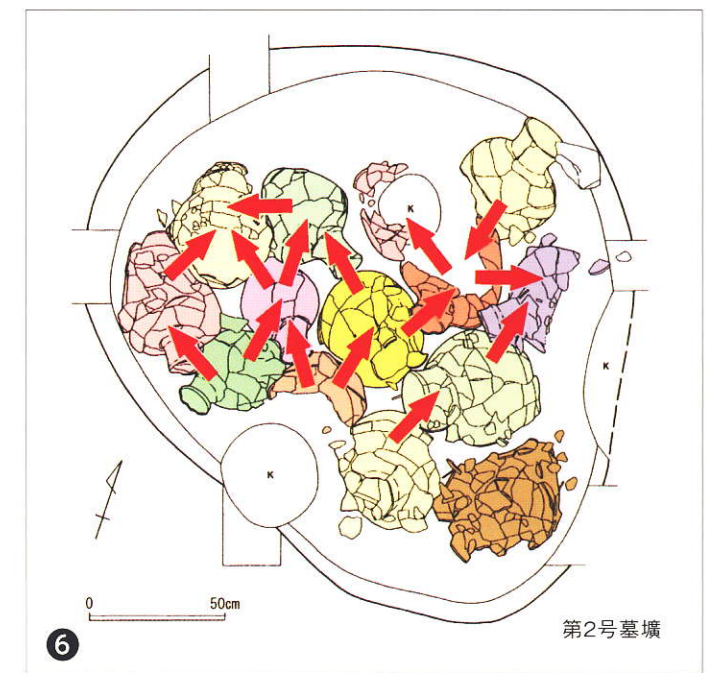
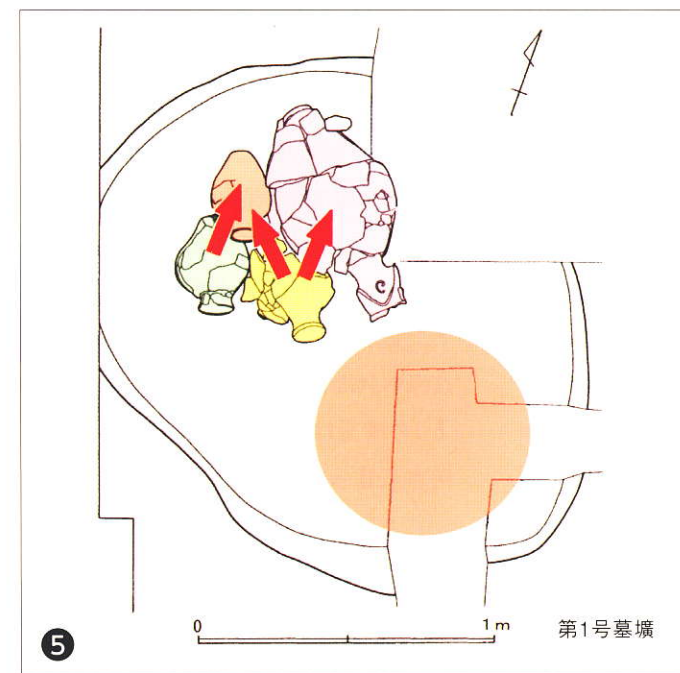
8. おわりに

泉坂下遺跡の発掘調査は、人面付土器を伴う再葬墓の存在を明らかにした。現地では再葬墓の研究に寄与できるよ



な観察と記録に努めたつもりではあるが、目的の主体を石棒から再葬墓へ急遽に変更したため、事前の準備が足らずに反省と課題も多い。とにかく整理と成果の公表を急ぐこととし、幸いにも明治大学博物館を事務局とする大久保忠和考古学振興基金2007年度公募研究及び同成果報告書等刊行促進費の助成をいただくことができた。発掘調査から報告書『泉坂下遺跡の研究』刊行にいたるまで、お世話をいただいた多くの方々に改めて感謝を申し上げますとともに、地元の常陸大宮市教育委員会が泉坂下遺跡の調査と保存に向けて動き始めたことをお伝えしておきたい。

- ① 人面付土器付近の覆土
- ② 人面付土器内部に堆積した土壌
- ③ 土器群の出土状況
- ④ 一次葬の土壙墓が推定される覆土
- ⑤ 土器の埋設順序と土器が埋設されない空間
- ⑥ 土器の埋設順序



後期旧石器時代初頭における 環状ブロック群と現代人の拡散(2)

島田 和高 (考古部門学芸員)

先に、後期旧石器時代初頭に営まれた環状ブロック群と呼ばれるムラ跡の特徴を4つのグレードに区分して紹介した(本誌57号参照)。環状ブロック群そのものの研究と並び、立川ローム層中の出土層位や石器の技術的な特徴をもとに行われている石器群の編年研究によると、環状ブロック群存続期間の前半期(立川ローム層第2黒色帯Ⅹ層に相当)には、グレード1と2および3が共存し、後半期(同じくⅦ層に相当)にはグレード4にグレード1と2が継続してこれに伴うという環状ブロック群の変遷をたどることができる。

3. ヒト集団の移動生活と環状ブロック群の形成モデル

旧石器時代のヒト集団は移動生活を営んでいた。どの旧石器時代のムラ跡も、移動生活を通して何らかの形で繋がっているのである。こうした遺跡相互の関係に着目して、先に分類した環状ブロック群相互の関係を考えてみよう。

グレード1とグレード2が最も一般的な環状ブロック群であることを考慮すると、単独の>60ブロックに複数の<60ブロックが伴うグレード1は、単位的かつ最小の集団の規模を反映していると考えられる。この評価から出発すると、複数の>60ブロックに複数の<60ブロックが伴うグレード2の形成は、中核的な石器製

作場所が増加していること示している。つまり、グレード1とグレード2は、単位的な集団が結合したり分散したりする離合集散の痕跡を反映していると考えられる(図の前半期)。

グレード3の質・量的に突出した石器製作は、遺跡の絶対数の少なさを考慮すると、それぞれの環状ブロック群の立地に直結した定地的な生業活動—例えば、石斧製作が観察される場合、木質資源の獲得もしくは狩猟獣の解体—が実施されていたことを示唆する(図の前半期)。しかしながら、グレード3の形成は、高い労働力の投下を伴う短期間の作業によって高密度な遺物分布が形成されたのか、あるいは回帰的かつ長期間に繰り返された作業によって累積的に遺物分布が形成されたのか、必ずしも一つの要因によるものではなかったと考えられる。いずれにせよ、上記した日常的な集団の離合集散と異なり、グレード3は、集中的な石器製作が必要とされる何か特別な生業活動が行われた場所であると考えられる。

グレード4は、グレード1・2・3に後続して成立したムラ跡の景観であり、グレード1・2における単位的なヒト移動集団の結合・分散のモデルに整合させるとすれば、環状ブロック群グレード4の大規模なムラ跡の景観は、グレード1・2における集団の結合よりも、さらに拡張された規模で集

団が集合したことにより生じたと考えられる(図の後半期)。つまり、何かの理由を契機にして、グレード1・2・3より多くの移動集団が集まり募った場所であると考えられる。

なぜ環状ブロック群が発生したのか、つまり環状に住まうという習慣はなぜ生まれたのだろうか。なぜ環状ブロック群は、その存続期間の後半期にかけて大形化したのか。そして、なぜ消滅したのか。以上述べてきた環状ブロック群の構造と変遷をもとに、日本列島における現代人の拡散と定着の過程に関する仮説を述べてみたい。

4. 現代人の日本列島への定着

これから述べる仮説は、約4万年前から約3万5千年前に展開した日本列島における現代人(ホモ・サピエンス)の拡散と定着に関する一側面を黒曜石利用のはじまりと確立、および環状ブロック群の発生と消滅の過程から考察したものである。ただし、現代人がどのようなルートをたどって日本列島に進入してきたのかは、いまのところ確証はない。朝鮮半島から九州地方への進入ルートや琉球列島を経由する海洋ルートなど諸説ある。

(1) 黒曜石原産地の発見

4万年境界の後、最初に日本列島に到達し、少なくとも中部・関東地方に到達し

たヒト集団は、現代人の一団であった。おそらく当初は、彼らは散漫な人口分布と低い人口密度を示していたと考えられる。そして、彼らが最初に取り組まなければならなかったのは、不案内な新天地において効率的に資源探索を推進することだった。移動生活を営む広い範囲で(例えば関東平野やそれ以上)石材・動植物資源・居住適地などがどのように分布し季節的にどう変化するのか、網羅的に知っておくことが生存の必須条件である。おそらく最初の資源探索は、何世代にもわたって網羅的にかつ広範囲にわたって続けられたのだろう。

その資源探索は、次第に山岳部や海洋付近にまで及んだに違いない。最初の黒曜石原産地の発見は、こうした数世代にわたる網羅的な資源探索の副産物としてもたらされたと考えられる。当然のことながら、神津島に黒曜石が存在することを予め知っていたのではなく、到達したらあったのだ。つまり、到達するためには、その動機と手段が必要だということである。以上の推測が正しければ、当時のヒト集団はフネを用いた海洋渡航の手段を保有していたこと、および海産資源の獲得を行っていたことが示唆される。もちろんフネの存在を示す遺物は見つかっていないし、当時の海浜付近に残された遺跡は、縄文海進(約7,000~8,000年前に最盛期)によって全て海中に没している。局部磨製石斧が木材加工に使われ、フネの製作に関与していたとする説もある。しかしまだこの時点では、環状ブロック群は登場していない。

(2) 環状ブロック群の発生と資源獲得

その後、ヒト集団は網羅的な資源探索をより安定した形で進めるために、集団のつながりを緊密にしていっていったと考えられる。つまり、いろいろな情報を携えた集団が集

い、情報を交換し、そして別れていくイメージである。こうした情報の共有と労働力の確保は次第に、黒曜石を含めて効率的に様々な生活物資を獲得するために欠かせない条件となったのだろう。

こうした動きが環状ブロック群の登場につながり、環状に住まうという伝統が発生したと考えられる。こうした文脈においては、グレード1とグレード2の環状ブロック群における離合集散を伴う日常的な移動生活に連動して、グレード3における集約的あるいは回帰的な生業活動が断続的に実施されたというモデルが支持される。これは、図に示した環状ブロック群存続期間の前半期に当たる。

(3) 大形環状ブロック群の役割

環状ブロック群の成立にともなって、ヒト集団は前段階よりも相対的に効率的に行われるようになった生活物資の獲得を背景に、次第に人口を増加させたと推測される。

環状ブロック群の後半期は、最後の氷河時代の中でも最も寒冷な時期(最終氷期最寒冷期)に近づきつつあり、こうした気候の寒冷化と人口増加が、一時的に食糧資源に対する局地的な人口圧の増大をもたらした可能性を考慮することができる。つまり、限られた食糧資源が許容する人口を超えて、集団どうしの住みにくさが増大したと考えられるのである。環状ブロック群存続期間の前半期から後半期にかけて、より多くの集団が集合したと考えられるグレード4の大形環状ブロック群への移行が認められるのは、グレード1と2による移動生活を基調としながらも集団間のストレスが増

大した場合に、一時的な大規模集住による社会的緊張の緩和、ならびに同盟関係と相互扶助の強化に資する場が必要とされたことを反映していると考えられる(図の後半期)。環状ブロック群後半期のグレード4である上林遺跡(本誌57号に紹介)では、多方面の原産地から由来する黒曜石製石器が残されており、様々な集団が集合した状況を傍証している。

おわりに

環状のムラは、新天地の資源を探索し、情報を交換し、集団間の緊張の高まりを低減するなど、現代人の日本列島での生存と定着を促進する社会的な役割を果たしたと評価することができる。このあと環状ブロック群は消滅し、二度と現れることはなかった。集団は分散したままで個別に生活する傾向を強め、その一方で地域的な社会的紐帯を強化した新しい成り立ちをもった旧石器時代社会への展開がそこにはある。

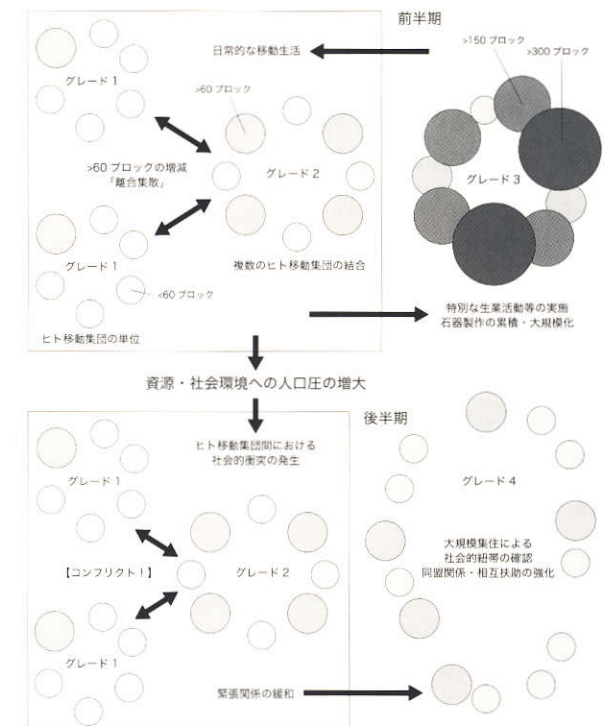


図 環状ブロック群存続期間の前半期から後半期へのヒト移動集団の構成と環状ブロック群の機能(著者原図)

ウサギは儲かる!?

—時田昌瑞ことわざコレクション「道化利やくのゑんむすび 兎人か兎に聳八疋」—

右から、「女うさぎ」や「南京鼠」、背中を見せキセルを手にするのはネコ、中央にはブタ、ウマ、左側には、イノシシ・ウシ・イヌ・洋犬、と動物たちが集まっています。彼らは、不動明王が持つ綱索の中にいます。これは一体何を描いたものなのでしょうか。

この絵のタイトルは、「道化利やくのゑんむすび 兎人か兎に聳八疋（一人の兎に婿八匹）」。「一人娘に婿八人」ということわざをもじったものです。このことわざの意味は、一つの物に対する需要が多いことのたとえ。つまり、異種の動物たちがごぞつて女うさぎを求める、という有様を描いたようです。動物の傍らにはセリフが書き付けてあります。思ひ思いに女うさぎを口説いているのでしょうか。読んでみましょう。

馬は、馬車などの役が増えたことを威張り、洋犬は、「他の犬と違い人間の寝起きをする畳の上へ土足で上がり、卵の知らぬ牛肉の粗はまた格別」と、いささか偉そうな態度です。「口説く」とはニュアンスが異なるようです。続いて、いのししは、自分ではなく牛肉がもてはやされていることに触れ、犬は、「此間の騒ぎで自分達が「ぶち殺される騒ぎさいやはや怖い世の中だ」と世相を語ります。馬車、牛肉の人氣が取り沙汰されるということは、明治初年の様相を映したものだと考えられます。一方、鼠は「わたしも此間中は少し用いられたが、うさぎの景気に押されておしまい。また世に出る事もあるふ」一つ先日まで、大事にされていた（ねずみもペットとされた）のに、ウサギ人氣に押されておしまい。また重用される時もあるだろう、と、言い寄るところか嫉妬しています。ウシ・ブタ・ネコのセリフはありません。対する女うさぎは「私は更紗でえりまきときているから外の獣を雄に持ったら変わりものを生んで一万円も儲けたいものでございます」。「儲けたい」とはどういうことなのか。

実は、明治4～6（1871～73）年にかけて、ウサギは「投機」の対象になる程大流行したのです。事の始まりは、明治初年のウサギの輸入。在来種にはない珍しさが人々を引きつけたのか、ただ飼うだけでなく、交配を進め変種作りにいそみしました。珍種のウサギの売買が盛んになり、ウサギの価格は暴騰し、売値150円を承諾する人も現れました。明治6年東京府における玄米一石の時価は4円80銭⁽¹⁾。2012年1月の東京都におけるコシヒカリ（精米）の小売価格は5kg2545円⁽²⁾で、一石（180kg）分は、91620円。当時の1円は、2万円弱に相当すると思われます。欲に駆られた人々の中には、ウサギの毛を後染めし珍種として売ろうとする者、極端な例では、ウサギで利を得た主人を妬み金の強奪を試みた奉公人、ウサギの売却時期でもめた結果尊属殺に至った者まで現れました⁽³⁾。これほどまでに人心を揺さぶるウサギの中でも、この絵に描かれたような白地に黒い



「道化利やくのゑんむすび 兎人か兎に聳八疋」大判錦絵35.4cm×25cm

ぶちのものは、「更紗」と呼ばれ珍重されたのです。この多色刷り版画は、ウサギの人氣を描いたものだったのです。

最後に、もてはやされたウサギの結末について補足します。異常事態を治めるために、明治6年、政府はウサギ1羽につき月々1円の税を課します。これを契機にウサギブームは収束したと言われています。瞬間にウサギは手放され、或いは皮やウサギ汁が売られる始末。実質を伴わない価格の高騰が招くはずみに気付かされる一件です。

（小川 祐貴子）

(1) 『明治ニュース事典 第二巻』毎日コミュニケーションズ 1985 「資料編 東京府の品目別物価表」
 (2) 総務省統計局「小売物価統計調査」
 (3) 『明治ニュース事典 第一巻』毎日コミュニケーションズ 1985 「兎」p.40～41
 ※全体を通して次の2書を参照した。「うさぎワンダーランド—夏休み 親子で楽しむ博物館—」石川県立歴史博物館 1999 赤田光男「ウサギの日本文化史」世界思想社 1997

古代瓦の作り方

—前場幸治コレクション—

今回は、前場幸治氏より当館に寄贈された「前場幸治コレクション」の中から、現代中国の瓦製作道具を紹介します。

一見復元品のように見えるかもしれませんが、中国の雲南省で最近まで実際に使われていた道具です。呼び方はいくつかありますが、平瓦用・丸瓦用とも「型」^{もこ}「模骨」、また平瓦用は「桶」など呼びます。

日本に瓦作りが初めて伝わったのは6世紀末の奈良飛鳥寺建設の時です。その時の瓦作りの道具は現存しておらず、実際どのような道具を使っていたか知ることはできませんが、古瓦に残る痕跡から、この資料とはほぼ同じ道具を使い、同じ工程で作られたと推測されています。

このような道具を使った、日本古代の瓦の作り方は次のようになります。

- ① 型を回転台の上に設置し、回しながら作業できるようにします。型に布をかぶせます。この布は後に型を粘土円筒からはずすときに、型と粘土の離れをよくするためにかぶせるもので、古代瓦に布目がついているのはこのためです。また、平瓦の型は写真のように細い板を縦に組み合わせて作られているため、瓦にこの細板の痕が縦の線となって残ります。
- ② 粘土を型に巻きつけます。薄い板状に切り取った粘土板を巻きつける方法が一般的ですが、粘土紐を輪積みして巻きつけることもあります。
- ③ 回転させながら叩き板でバンバン叩き締め、粘土内の空気を抜きます。叩き板は「しゃもじ」のような形をしていて、紐が巻かれたり格子文様が彫られたりしており、瓦にこの痕跡が残ります。ただし、丸瓦はそれをきれいに消していることが多いです。
- ④ 型と布をはずし円筒状の粘土ができます。内側から鎌などで切れ目を入れて、平瓦なら4枚、丸瓦なら2枚に分割します。平瓦の型には把手（とって）があり、開閉できるようになっていますが、これは型が円錐形で上の径が小さいため、型をすぼめないと粘土円筒から抜けられないからです。また、型の周りに縦に細い割り箸のような棒が付いています。4か所（丸瓦用は2か所）にあるのですが、この痕が粘土円筒の内側に付き、分割する位置の目印となります。

分割後は天日干してから窯で焼成します。古代の瓦窯は大きく2種類あり、一つは煙出しに向けて登っていくように斜面に細長く掘った「登り窯」で、飛鳥寺建設の時は登り窯が使われました。1000度以上の高温になり、

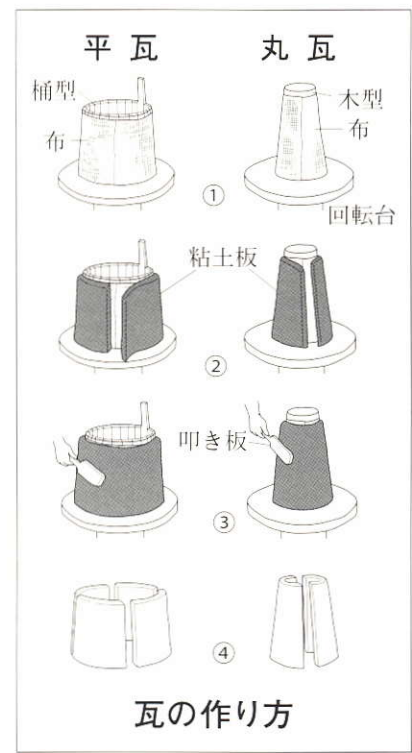
300～500枚程度の瓦を窯詰め出来ました。もう一つは窯底が平らな構造をしている「平窯」です。平窯は日本では登り窯より遅れて、7世紀後半の藤原宮造営時に用いられました。

平瓦・丸瓦作りの工程は以上ようになりますが、平瓦についてはこのような作り方を「桶巻作り」または4枚一度に出来るので「四枚作り」と呼びます。平瓦桶巻作りは飛鳥～白鳳時代に主体的に用いられた技法です。しかし、奈良時代になると次第にかまぼこ形の成形台で、1枚ずつ作る「一枚作り」という新手法に取って代われ、それ以後桶巻作りは日本本州ではほとんど見られなくなります。

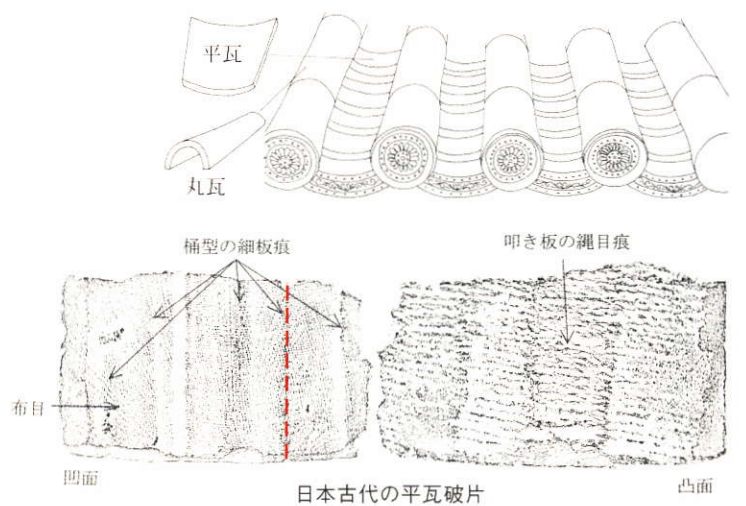
しかし、中国や朝鮮半島などでは近年まで桶巻作りでの平瓦製作技法が残っていました。まさにその中国の道具がこの資料というわけですね。日本では古くに廃れてしまった古代の瓦作りを、現代に教えてくれるという意味で、この中国の道具は非常に興味深い資料と言えるのです。

このような貴重な資料を蒐集された前場幸治氏ですが、2011年10月にご逝去されました。心より哀悼の意を捧げます。

（明治大学博物館兼務職員：鈴木知子・森本尚子）



中国雲南省の瓦製作道具（現代）



日本古代の平瓦破片

特別展 人類史への挑戦

—南山大学考古・民族コレクション— を開催しました

愛知県名古屋市の南山大学人類学博物館との交流事業2年度目には、同館の所蔵品を東京で公開するとともに、昨年度より引き続きのシンポジウムの3回目に関連企画と位置付けました。展示会は本年1月20日(金)に開幕し、去る3月10日(土)盛況の内に閉幕しました。開幕初日には南山大学からミカエル・カルマノ学長、青木清副学長(人類学博物館長)他、本大学からは納谷廣美学長・長堀守弘理事長他臨席の下、オープニング・セレモニー及び展示内覧会が執り行われました。

南山大学人類学博物館の所蔵品と言うと、地元名古屋市の大須二子山古墳や愛知県渥美半島の保美貝塚出土の遺物などありますが、G・グロート神父による収集品など千葉県を中心とする関東地方の貴重な縄文遺物も多数出展されました。日本最古級と言われる土偶(縄文早期)や丸木舟(縄文後期)など注目の資料、また、J・マーリンガー神父の旧石器コレクションはヨーロッパ各地にわたり、人類学方面ではタイ、ニューギニア、オセアニア関係の資料と、首都東京で開催するにふさわしい出展品に彩られていました。展示を担当した人文学部の黒沢浩准教授は、元考古学博物館の学芸員で2004年3月まで明治大学職員として在職されていました。新博物館建設時には主に黒沢准教授が特別展示室関係を担当されており、今回、南山大の教員という立場でその施設を利用されることになりました。なお、出展品と解説・論考を収録した展示図録を引き続き博物館窓口で頒布中です。数に限りがありますのでご希望の方はお早めにお求めください。



シンポジウム『コレクションの再生—資源化される博物館資料』を開催しました

交流事業1年目は2010年7月に「ホンモノ/ニセモノの論理—文化の真正性と博物館資料—」をタイトルに明治大学で、翌1月に「博物館資料の境界—自明性への問い—」をテーマに南山大学で、合わせて2回のシンポジウムを開催しましたが、その第3弾が特別展の関連企画として本年1月21日(土)に開催され、両館の収蔵資料を通して「博物館資料とは何か?」という課題に迫りました。

- 基調報告 加藤隆浩(南山大学外国語学部教授) 文化の資源化と文化の復興
 報告1 忽那敬三(明治大学博物館学芸員) 収蔵庫を“発掘”する—茨城県玉里舟塚古墳の再整理事例から
 報告2 領塚正浩(市立市川考古博物館学芸員) 大学・地域博物館の連携とコレクションの文化資源化—G・グロート神父のコレクションを中心として
 報告3 日比佳代子(明治大学博物館学芸員) 旧明治大学刑務博物館初期蒐集資料の再評価
 報告4 黒沢 浩(南山大学人文学部准教授) 民族誌資料による文化表象と再文脈化

現在、いやこれまでもそうでしたが、スペースが嵩むということから資料群の受け入れを忌避するような傾向があります。これは博物館の機能を考えるとゆゆしき動向ですが、これまで博物館資料論がなかなか議論の俎上に載らなかった理由なのかもしれません。外部からの借用品を目玉とする“お宝”展がもてはやされる一方、収蔵室に死蔵されて活用の方途のない資料も多くあるに違いありません。それらは、本来、様々な形で教育や研究に活用される素材であるべきです。

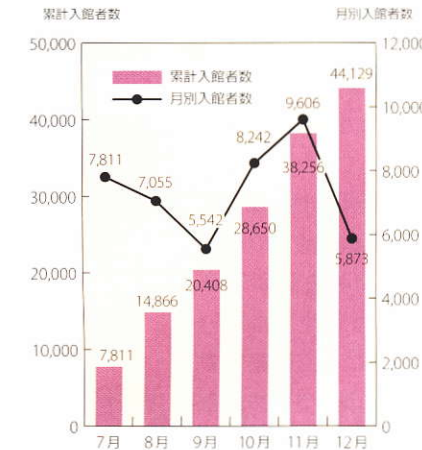
加藤報告では資料の情報化とそれによって実現する共同作業による資料に対する意味付けの「政治性」の打破やさらなる社会貢献のための可能性について言及され、忽那報告では再整理による新発見の数々、領塚報告では失われたグロート神父の事績の記憶回復、日比報告ではギロチンやニュルンベルクの鉄の処女製作の背景、黒沢報告では民族誌資料活用のさまざまな局面や再活用の方法などが述べられるなど、興味深い報告を揃えることができました。

これら、3回のシンポジウムでは博物館資料論について合計15本の報告がありましたが、これらは2012年度の事業として成果刊行物が出版される計画となっています。



博物館入館者数の動き(2011年7月~12月:延べ人数)

2004年4月以降の総入場者数累計472,428人



7月~12月	延べ人数
図書室利用者	3,260
教室等利用者数	605
講座受講者	175



民衆の画像展 展示風景

特別展来場者内訳		開催日数	来場者数
7/1~7/31	漆器 JAPANWARE 文理融合研究から見てきた 漆の過去・現在・未来	31日間	2,450
8/21~8/28	民衆の画像展	8日間	989
9/5~9/29	RE/MIXED マレーシアと日本におけるサステイナブル建築デザインの地平	25日間	1,727
10/7~12/18	明治大学の国際交流130年	73日間	5,162

団体見学の記録 2011年7月~12月

- 【一般】 警視庁竜巻警察署警友会OB(31名)・大串貝塚塾(45名)・さいたま市シニアユニバーシティ北浦和校史跡めぐりクラブ(30名)・ウォーキング DU(18名)・東京シティガイドクラブ(15名)・かながわ考古同好会(10名)・ウォーク60(60名)・麻生第一中学校成人教育委員会(40名)・ところざわ倶楽部 野老澤の歴史をたのしむ会(15名)・千教研市川支会人権教育部会(15名)・放送大学(25名)・マレーシアUTM大学関係者(10名)・脳活き活き教室(13名)・群馬歴史散歩の会(28名)・旧錦華小学校卒業生クラス会(7名)・長野県上伊那地区南部保護司会(11名)・ミキクラブ(15名)・千葉県立若松高等学校PTA(16名)・総友会(20名)・歴史倶楽部あだち(12名)・六大学野球OB会(45名)・千葉県立成田国際高等学校PTA(37名)・明治大学校友会(15名)・調布館商組合(25名)・神奈川県立川崎工科大学公開講座(20名)・史跡と自然の会(17名)・丸の内はんじゃ会(20名)・いわき地域学会(20名)・佐倉土曜あしの会(20名)・江東区総合市民センターコミュニティカレッジ(27名)・東京都立城南職業能力開発センター大田校(17名)
- 【小・中学校】 聖徳大学附属女子中学校 3年生(21名)・福島市立福島第二中学校(6名)・明治学院中学校(49名)・明治大学付属中野中学校第2学年(191名)・駿台甲府中学校(72名)・新潟県上越市立吉川小学校 6年生(43名)・桐朋女子中学校 第3学年(51名)・東京都立武蔵高等学校附属中学校 3年生(60名)・東京都立桜修館中等教育学校(21名)
- 【高等学校】 東京都立千歳丘高等学校 2年生(15名)・川崎市立川崎高等学校 1年生(24名)・松商学園高等学校(65名)・本庄東高等学校 1・2年生(47名)・大宮開成高等学校 2年生(33名)・栃木県立佐野東高等学校 1年生(44名)・茨城県立古河第一高等学校 1年生(42名)・文化学院 2年ドキュメンタリー映画コース(15名)・高輪高等学校 1年生(35名)・市立函館高等学校 2年生(44名)・北海道苫小牧南高等学校(40名)・長野県松本美須ヶ丘高等学校 1年生(41名)・東京国際学園高等部(15名)・千葉聖心高等学校 1・3年生(7名)・明星高等学校 1年生(16名)・福島県立相馬高等学校(40名)
- 【大学・大学院・専門学校】 明治大学法学部 Law in Japan Program(14名)・獨協大学 新井孝重ゼミ(4名)・杉野服飾大学(3名)・明治大学法学部 小山廣和ゼミ(6名)・東北芸術工科大学歴史遺産学科(有志)(9名)・お茶の水女子大学 文教育学部 考古学通論2受講生(17名)・明治大学経営学部 薩摩演習(8名)

M2 カタログ

山形土偶ボールペン 販売中!

好評
です!!

明 明治大学博物館では、「土偶」と聞いて誰もが真っ先に思い浮かべるであろう「遮光器土偶」の他に、頭部が山のように三角形になっていることからその名がついた「山形土偶」を展示しています。大英博物館で開催された「THE POWER OF DOGU」展に出品されたこともあるこの土偶、すでに販売されているクリアファイルに続きボールペンにもなりました。赤と黒の2色が使える便利な2wayタイプで、価格も200円と大変お買い得です。



千葉県江原台遺跡出土 山形土偶



博物館
友の会から

友の会分科会
旧石器・縄文文化研究会最近の活動から

毎月第4週目の木曜日14時前に博物館教室にメンバーが集まり始まる。時には、メンバーが表面採集した石器や土器、または自分で作った石斧・やじりを中心にして、語り合いが進む。この石器はいつの時代の物だろうか、この土器破片の型式は? などなど。

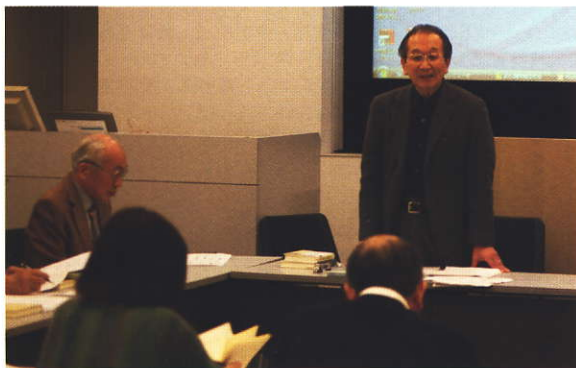
当会は2000年4月に石器文化研究会として発足し、人々が石を生活の道具として使った旧石器から弥生時代迄の石器を中心とする研究、石器文化の全般を研究することで活動してきた。しかし外部の方々からは旧石器時代のものだけを取り上げている分科会との見方が多く聞かれ、2011年4月から旧石器・縄文文化研究会と改称した。

2010年1月から明大安森教授のご著書「旧石器時代の日本列島史」をメンバーの持ち回りで輪読会を行った。意見交換をする中で実際に本書が取り上げている石器を手にとってみたいとの声があがり、島田学芸員から「こうした物は見ただけでは解らない。実際に手に取って見てみよう」との事、茂呂型ナイフ形石器の複製

品、杉久保型ナイフ形石器をメンバーがそれぞれ手にとって違いを確かめ、感触を楽しんだ。輪読を1年で終了、2月例会には、安森先生をお招きして疑問点を解明した。

お互いが学び合い、発表する場でもあり、最近T会員より「土偶について」「古きに学ぶー温故知新一」と題した発表が行われた。

教室だけが研究会の場ではなく、昨年5月には、東所沢、柳瀬川左岸の縄文遺跡の散策と河原での石器作り、10月には東京国立博物館平成館考古展示室で特集陳列されていた「石に魅せられて先史時代の人々」を明大OB及川氏の解説で見学、11月には山梨県立考古博物館特別展「縄文土器名宝展」を見、さわやかな秋風の中、甲斐風土記の丘を散策した。今年2月には東京都埋蔵文化財センターを見学、同センター比田井・長尾 両氏から詳細な解説を受け、質疑を行い2012年度の研究テーマ「関東・甲信越の縄文土器の編年」の足がかりとした。(Y生)



旧石器・縄文文化研究会例会 安森政雄先生講演(2012年2月23日)

【友の会 分科会紹介】

- ・古文書を読む会
- ・平成内藤家文書研究会
- ・弥生文化研究会
- ・草生水(くそうず・石油のこ)の会
- ・東アジアの中の古代日本研究会
- ・古文書の基礎を学ぶ会
- ・工芸の会
- ・旧石器・縄文文化研究会

【明治大学博物館友の会 連絡先】

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

明治大学博物館 友の会宛

メールアドレス meihakutomonokai@yahoo.co.jp

※博物館に友の会の担当者は常駐しておりません。

連絡は必ずハガキまたはメールをお願いします。

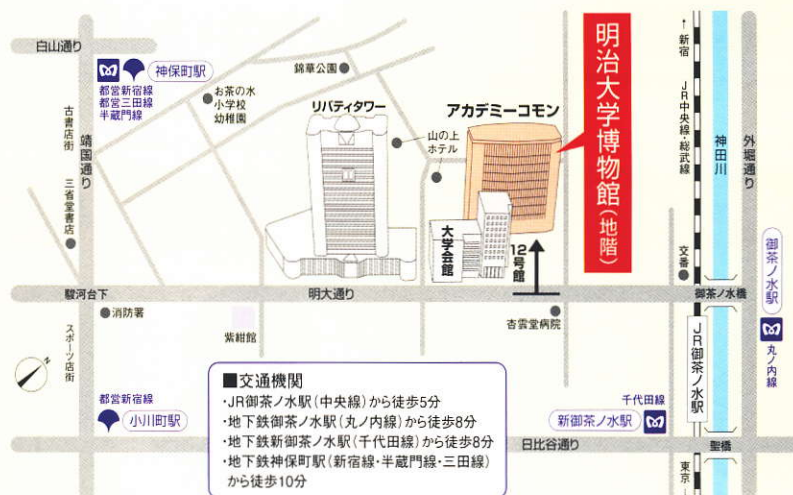
博物館案内

博物館案内

- ◆開館時間
10:00~17:00(入館16:30まで)
- ◆休館日
夏季休業日(8/10~8/16)
冬季休業日(12/26~1/7)
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- ◆開室時間
月~土 10:00~16:30
- ◆閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
- ※図書室はどなたでもご利用いただけます。
- ※蔵書は閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



- 交通機関
- ・JR御茶ノ水駅(中央線)から徒歩5分
 - ・地下鉄御茶ノ水駅(丸ノ内線)から徒歩8分
 - ・地下鉄新御茶ノ水駅(千代田線)から徒歩8分
 - ・地下鉄神保町駅(新宿線・半蔵門線・三田線)から徒歩10分

編集
後記

今回の【収蔵室から】では、商品・考古部門が寄贈を受けたコレクションを紹介しています。商品部門は時田昌瑞ことわざコレクションの資料を取り上げ明治期に起こった「ウサギブーム」に触れ、考古部門は前場幸治瓦コレクションから現代中国で実際に使われていた瓦製作道具を紹介するとともに、古代瓦の作り方を説明しています。今回取り上げた両コレクションとも商品・考古のコラム展で随時展示紹介していきますので、明治大学博物館までお立ち寄りください。(古豊)